

Title	腎平滑筋肉腫の1例
Author(s)	小林, 峰生; 佐井, 紹徳; 加藤, 隆範; 青田, 泰博; 佐橋, 正文
Citation	泌尿器科紀要 (1987), 33(8): 1218-1220
Issue Date	1987-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/119235">http://hdl.handle.net/2433/119235</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 腎平滑筋肉腫の1例

市立半田病院泌尿器科（部長：小林峰生）

小林 峰生・佐井 紹徳・加藤 隆範

名古屋大学医学部泌尿器科学教室（主任：三矢英輔教授）

青 田 泰 博・佐 橋 正 文

## A CASE OF LEIOMYOSARCOMA OF THE KIDNEY

Mineo KOBAYASHI, Shotoku Sai and Takanori KATO

*From the Department of Urology, Handa Hospital  
(Chief: Dr. M. Kobayashi)*

Yasuhiro AOTA and Masafumi SAHASHI

*From the Department of Urology, Nagoya University, School of Medicine  
(Director: Prof. H. Mitsuya)*

A case of renal leiomyosarcoma seen in a 65-year-old man is reported. On November 15, 1985, he complained of right flank pain and high fever. On right renal angiography and computed tomography showed a mass on lower pole of the right kidney. On December 10, 1985, the patient underwent right radical nephrectomy. The histological diagnosis was leiomyosarcoma probably originating from the right renal capsule. Forty-six cases of renal leiomyosarcoma, including this case, in the Japanese literature have been reviewed and are discussed.

**Key words:** Leiomyosarcoma, Kidney

## 緒 言

腎平滑筋肉腫は比較的稀な疾患である。われわれは右腎下極被膜より発生したと思われる腎平滑筋肉腫の1例を経験したので、本邦における本腫瘍についての統計学的考察を加えて報告する。

## 症 例

患者：65歳，男性，大工

主訴：右側腹部痛，発熱

既往歴・家族歴：特記すべきことなし

現病歴：1985年11月15日に発熱，右側腹部痛が出現。近医を受診し，右側腹部腫瘍を指摘され，1985年11月25日当科を紹介され来院した。来院時は特に自覚症状なく，1985年11月26日入院した。

現症：体格中等度，栄養良好，脈拍および呼吸は正常。心肺に聴打診上異常なく，表在リンパ節も触知せず。腹部触診にて，右側腹部に表面平滑，弾性硬，圧

痛のない，呼吸性移動良好の手拳大の腫瘍を触知した。

一般検査成績：血圧 182/80 mmHg，赤沈，血液一般，血液生化学，尿定性：尿沈渣に異常なく，胸部単純写真，心電図も異常なし。尿細胞診陰性。

X線検査所見：腹部単純写真では右腎下極輪郭像の腫大を認めた。排泄性尿路造影では右腎盂腎杯が上方へ偏位しているが，描出は良好で，腎盂腎杯像の変形や辺縁不整は認めなかった。ネフログラムにて右腎下極が直線状に下方より圧排され，この下に腫瘍陰影を認めた。逆行性腎盂造影では，右腎盂腎杯が上方へ圧排され，右上部尿管が内側へ偏位していた。CT では右腎下極に濃淡の不均一な充実性の腫瘍を認め，右腎実質は前内側へ圧排されていた（Fig. 1）。選択的右腎動脈造影では，右腎実質は均一で辺縁は明確に描出されているが，右腎下極に実質と明瞭に区別される hypovascular mass を認め，腫瘍辺縁の血管増生および pooling 像を一部に認めた（Fig. 2）。以上の所

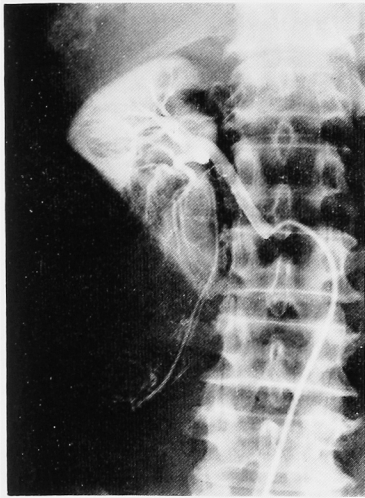


Fig. 1. Selective renal angiogram.

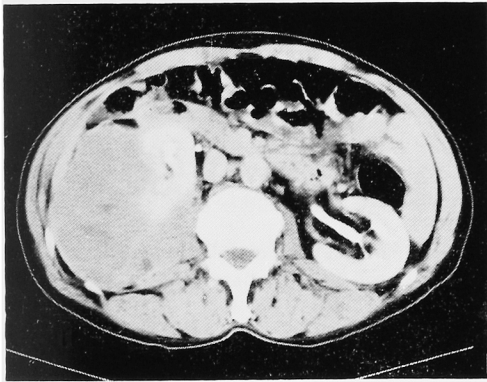
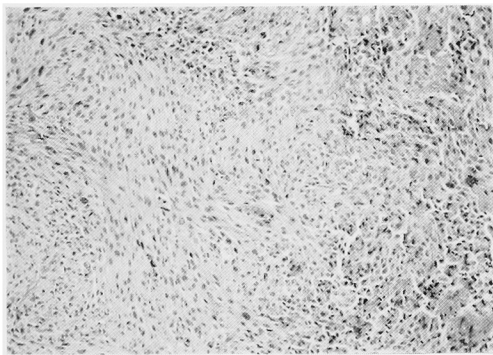


Fig. 2. CT scan.

Fig. 3. Microscopic appearance of the leiomyosarcoma (H and E,  $\times 150$ ).

見より、右腎細胞癌の診断にて1985年12月10日経腹的右腎摘出術を施行した。

手術所見：右腎下極に小児頭大の腫瘍を認めた。右結腸肝彎曲部は前方へ圧排され、腎被膜前面は一部結腸漿膜面と強く癒着していたが、腫瘍の周囲組織への

明らかな浸潤は認めなかった。右腎動脈を腹部大動脈、下大静脈間で結紮後、腎莖部周囲、Gerota 筋膜、周囲脂肪組織とともに一塊として右腎を摘出した。下大静脈周囲 腹部大動脈右側のリンパ節郭清を行なった。右腎前面より剥離した右結腸漿膜面に拇指頭大のリンパ節様腫瘍を認め、これを切除した。右結腸切除は施行しなかった。

摘出標本：摘出標本全体の重量は 695 g、右腎下極の腫瘍は  $10 \times 9 \times 7$  cm。腫瘍は右腎下極に腎実質と被膜の間に増殖し、断面は黄白色、弾性軟 充実性であった。肉眼的には腫瘍は被膜を越えて増生していなかった。

病理学的所見：腎被膜に接して腫瘍があり、紡錘形細胞が密に増殖し、束状の錯綜を認めた。核の異型を認め、核分裂像を多数認めた (Fig. 3)。鍍銀染色で‘箱入り像’を呈していた。腎平滑筋肉腫の病理診断であった。右結腸漿膜より摘出した腫瘍は神経線維腫であった。郭清リンパ節には転移を認めなかった。

術後経過：術後20日目より高熱、右側腹部痛が出現した。注腸造影にて右結腸肝彎曲部に結腸瘻の発生を認め、限局性腹膜炎の状態であった。抗生剤投与、IVH、絶食にて保存的治療を施行したが発熱が続き、術後34日目に全麻下に再開腹手術を施行し、右肝下面へ排液管を挿入した。術後腸瘻は徐々に自然閉鎖した。1986年5月10日よりテガフル・ウラシル配合剤 (UFT<sup>®</sup>) 6錠内服投与を開始した。放射線療法は施行せず、1986年6月7日退院した。退院後転院し、術後16カ月目の1987年4月4日他院にて癌死した。

## 考 察

腎肉腫は腎の悪性腫瘍中約3%を占める比較的稀な腫瘍である。腎平滑筋肉腫は腎肉腫の中で最も多い疾患<sup>1)</sup>で、本邦では1957年南ら<sup>2)</sup>の報告以来、近年その報告例が増加している<sup>3,4)</sup>。自験例を含め46例の腎平滑筋肉腫を集計した。

罹患年齢は18歳から68歳、平均46.7歳で、性比は男24例、女22例であった。患側は右側20例、左側23例、両側2例、不明1例であった。症状は側腹部腫瘍26例 (56.5%)、疼痛26例 (56.5%)、発熱14例 (30.4%)、肉眼的血尿11例 (23.9%)、体重減少と陰嚢腫大はともに4例 (8.7%) などであり、腎細胞癌に比し、肉眼的血尿の出現頻度が低い。これは本腫瘍が腎被膜、腎盂腎杯、腎内血管壁の平滑筋を発生母地としており、特に腎被膜より発生した場合、腎の外側方向へ発育進展することが理由と考えられる。自験例も右腎実質と腎皮膜の間に増殖発育しており、肉眼的血尿は認

めなかった。

術前の腎肉腫と診断することは困難であるが、腎血管造影では hypovascular な腫瘍であることが多い。腎血管造影が施行された 27 例中 18 例 (67%) が hypovascular あるいは avascular な腫瘍で、hypervascular であったものは 4 例 (15%) と少なかった。自験例も腫瘍中心部は hypovascular であったが、腫瘍辺縁部の血管蛇行、pooling 像を認めた。

治療は 46 例中 43 例に腎摘出術がなされている。化学療法併用 15 例、放射線療法併用 5 例、両者併用 6 例であった。症例数が少なく、補助療法の効果の評価は困難である。現時点ではより早期の腎摘出術が唯一の確実な治療法であろう。

予後は不良である。鈴木ら<sup>5)</sup>によれば、本邦報告例 32 例での 10 カ月実側生存率は 66.4% と報告している。

1 施設での長期観察では、Farrow ら<sup>1)</sup>の 15 例、Srinivas ら<sup>6)</sup>の 8 例の報告がある。Farrow らによれば腎平滑筋肉腫 15 例中 14 例が 4 カ月から 5 年半の間に死亡しており、Srinivas らの報告では 8 例中 7 例が 2 カ月から 16 カ月の間に死亡している。このように予後不良の原因は、腎平滑筋肉腫が症状に乏しく発見が遅れること、腫瘍自体の悪性度が高いことなどが考えられる。より早期の発見診断の努力と、手術を中心とした集学的治療の確立が必要と思われた。

## 結 語

65 歳、男性に発生した右腎平滑筋肉腫の 1 例を報告した。本邦 46 例の腎平滑筋肉腫を集計し、若干の統計学的考察を行なった。

本論文の要旨は第 152 回日本泌尿器科学会東海地方会において発表した。

## 文 献

- 1) Farrow GM, Harrison EG Jr, Utz DC and ReMine WH: Sarcomas and sarcomatoid and mixed malignant tumors of the kidney in adults-part 1, Cancer 22: 545~550, 1968
- 2) 南 武・安藤 弘・川口安夫・坂本忠昭・竹野光彦・三橋寛七 腎被膜腫瘍の 1 例 (平滑筋肉腫). 臨皮泌 11: 7~13, 1957
- 3) 陳 瑞昌・町田豊平・増田富士男・三木 誠・佐々木忠正・上田正山・谷野 誠・小路 良・赤阪雄一郎: 腎平滑筋肉腫の 2 例. 日泌尿会誌 69: 1512~1521, 1978
- 4) 郷司和男・中西建夫・岡 伸俊・中野康治・岡田弘・浜見 学・守殿貞夫・石神襄次: 腎平滑筋肉腫の 1 例. 泌尿紀要 32: 233~239, 1986
- 5) 鈴木明彦・北川元昭・鈴木和雄・田島 惇・阿曾佳郎: 腎平滑筋肉腫の 1 例. 臨泌 38: 883~886, 1984
- 6) Srinivas V, Sogani PC, Hajdu SI and Whitmore WF Jr: Sarcomas of the kidney. J Urol 132: 13~16, 1984

(1986年8月4日受付)